

派が出るまでの間約三百年間の主流派となった。

(平成八年二月例会)

ハーヴェー以前の血液循環理論について

藤 倉 一 郎

エラストラトスは動脈と肺静脈には血液はなく、空気が流れていると考えていた。しかし、ガレノスは動脈に針を刺して、血液が出ることから、動脈に血液があると考えていた。だが、血液循環という考え方には到っていないかった。

「腸から吸収された栄養分をもつ血液は門脈をへて肝にはいり、ここで「自然精気」が血液に加えられる。血液はすべて肝で生じ、静脈の中を行きつ戻りつする。その血液が大静脈をへて心臓の右側に達する。そこから肺にいたり血液のなかの不純物が外に出されてきれいになった血液が肺動脈とおろ心臓の右側に戻る。右心室から血液の一部が中隔の小孔を通じて左心室にゆき、ここで肺から肺静脈をへて心臓の左側に達した外界のプネウマと会って「自然精気」を「生命精気」に変える。左心室からでて全身にゆきわたる動脈は、この「生命精気」と血液を運ぶのである。その一部が脳に至って「動物精気」となり、それが神経によつて全身の諸器官に分かたれる。

このガレノスの理論は従来、一五五三年のセルベトス、一

五五九年のコロンボ、一五七一年のチェザルピーノ等によつて肺循環理論が発見され、ついでハーヴェーによつて一六二八年「動物における心臓と血液の運動の解剖学」によつて血液循環理論が確立されたと考えられていた。

ところが一九二四年フライブルク大学医学部のエジプト出身の若いアラビヤ人、アト・タタウィが、ハーヴェーよりも四〇〇年も前の一三世紀カイロのイヴン・ナフィスが肺循環理論を発見していたという学位論文を提出したのであった。

イヴン・ナフィスについて

イヴン・ナフィスは一二一〇年ダマスカスに生まれた。アラビアの医学史家で眼科医のウサイビヤは同じくダマスカスに一二〇二年に生まれている。二人は医学校も同じであり、同じ病院の同僚であったのである。ヌーリー病院の医長イブン・アッ・ダフワールが二人の師であった。二人はやがてカイロのナースリイ病院に移った。しかし僅かな月日の後ウサイビヤは、華やかなカイロの街を離れて、シリヤの砂漠へいき、シリヤ大公に仕えることになるのである。ウサイビヤの「医師列伝」は三九九人のアラビアの医師の伝記を書いたもので一二四五年に完成しており、ヨーロッパにも伝わって有名であるが、イヴン・ナフィスには触れていない。ナフィスは長い間ナースリイ病院の医長をつとめ、カイロの医師の長の職を果たし、講義を続けた。ウサイビヤは自分より若い出世したナフィスに会うことがなかった。

他の伝記作者は次のように伝えている。ナフィスは背が高

く、やせ型で、細面の上品な学者らしい顔をしていた。医師のほかに、法律、文法学、論理学、哲学についても書いたり、教えたり有名な法律学者でもあった。アビセンナと同じくらしい優れた医師であった。エジプトの若い医師にガレノスやアビセンナの著作をてほどきし、暗記するほどに熟達していた。しかし、権威に無批判に従っていた訳ではなかった。「ガレノスの表現をあまり高く評価せず、その弱さや背後に何もないその回りくどさを批判した。種々の動物の身体構造には違いがある。比較解剖が必要であり、その違いに注目しなければならぬ。」と書いて多くの著書を書いた。

彼の著書の『アビセンナのカノンの解剖学への注釈』のなかにカイロのアト・タタウィは肺循環の論述を確認し、博士論文に提出したのであった。『アビセンナのカノンの解剖学への注釈』はラテン語に翻訳されていないが、アラビアの書誌学者の間では有名であった。そのコピーがベルリン、パリ、ポトリアン、エスクリアルルの四か所にあり、更にダマスカス、ベルシャの二か所にもあってこれらを検討して、ハダツドらは次のように要約している。

一、ガレンのいうように心室中隔には孔はなく、厚い。
二、血液は肺動脈から肺にいき、滲出して空気と混合し、浄化され肺静脈を通過して心臓の左側に達する。

三、肺動脈は壁が厚く二重構造であり、肺静脈は壁は薄く単構造である。

四、肺は細気管支、肺動脈枝、肺静脈枝が粗い多孔性の物質

でつながっている。

五、肺動脈は肺に栄養を与える他に血液と空気を混合して動物精気を与える。

六、心臓は動物精気をつくりそれを全身におくる。

七、心臓は右心室で栄養されるといふのは間違いで、冠動脈がある。

八、肺静脈は煤で満たされているのではなく、肺から血液で満ちている。

これらのことから、ナフィスの肺循環理論は極めて論理的であり、時代を越えた炯眼には驚嘆のほかはない。原書によつた更なる研究の望まれるところである。

(平成八年四月例会)

オランダ商館長の住友銅吹所見物と饗応・贈答

片桐 一 男

オランダ商館長の江戸参府旅行は、ヨーロッパ人が鎖国日本を定期的に旅する唯一の機会であり、鎖国下の日本人がヨーロッパ人を観察し、接触できる貴重な機会であった。

往路・復路において、一宿一泊の大多数の宿はさておき、往路・復路ともに何日か宿泊した定宿、すなわち、江戸・京・大坂・下関・小倉・五都市の「阿蘭陀宿」は、鎖国時代、長